

一分金と小判の重量測定

吉川 潤

2007年4月8日から5月20日にかけて、関西大学博物館では、平成19年度企画展「小判とおかね～近世から近代の金銀貨幣～」が開催された（写真1）。近世の小判や丁銀から、二十円金貨や一円銀貨を始めとする近代の金銀貨、甲号兌換銀行券などの紙幣、世界各国の硬貨まで、多くの貨幣が展示されて好評を博した。ところで、今回の展示が終了した後、筆者は展示されていた貨幣の内、一分金と小判について、ある調査を行う機会に恵まれた。展示中から興味を持っていた点であるが、一分金と小判の重量についての調査である。

近世の貨幣については、江戸を中心とする東国では金貨が流通し、大坂を中心とする西国では銀貨が使われていたことがよく知られている。この内、丁銀や豆板銀といった銀貨は、ひとつひとつの量目（重量）が異なる秤量貨幣であり、量目に合わせて貨幣としての価値も異なるため、秤で重さを測ってから使われた。今回、展示された豆板銀をみると、同じ種類の豆板銀でも大きさや形が大きく異なっており、ひとつひとつの重量が異なっていたことが実感できる（写真2）。一方、一分金や小判などの金貨については、計数貨幣であり、ひとつひとつの量目や貨幣としての価値は一定であるとされている。同じ種類の一分金同士、小判同士であれば重量は等しく、価値も同じになるよう造られている訳である。また、一分金と小判の重量については、従来の研究からは、ひとつの法則がみられることが指摘されている（『図録 日本の貨幣 2』）。一分金1枚（1分）の価値は、小判1枚（1両）の四分の一であるが（1両＝4分）、一分金は量目（重量）も小判1枚の四分の一になるように造られているという点である。従って、小判1枚と一分金4枚の重さが等しいことになる。なお、これまでの研究では、この法則は、徳川家康がいまだ関東に領国を持つ一戦国大名に過ぎなかった頃、その領国で発行した武蔵墨書小判と額一分金という貨幣の間にもみら

れ、それが近世の小判や一分金に引き継がれたものであると指摘されている。すなわち、一分金は同じ種類のものであれば、1枚の重量が同じになるように造られており、それは小判1枚の重量の四分の一になるという訳である。今回の展示でも、多くの一分金が展示されたが、筆者はそれらの重量を測定し、この法則を実際に自分の目でみてみたいと思っていたのである。

実際に重量を測定した結果が、表1と表2である。表1は一分金についての結果だが、今回展示された一分金の内、慶長一分金（10枚）、元文一分金（11枚）、文政一分金（5枚）、天保一分金（3枚）、安政一分金（1枚）、万延一分金（1枚）の計31枚について重量の測定を行った。それぞれの重量をみると、慶長一分金10枚の重量は4.40～4.45gの間であり、その差は0.05g、次に元文一分金は3.25～3.28gで差は0.03g、文政一分金は3.24～3.29gで差は0.05g、天保一分金は2.80～2.82gで差は0.02g、安政一分金は2.24g、万延一分金は0.83gとなっていることがわかる。1枚ずつしかない安政一分金と万延一分金を除くと、同じ種類の一分金の重量はほとんど等しく、その差は最大でも0.05gしか認められないことが確認できる。

また、今回展示された小判の内、表1の一分金に対応する時代のもを挙げると、元文小判6枚、文政小判9枚、天保小判8枚、万延小判2枚の25枚になるが、その重量をまとめたのが表2である。一分金と同様にその重量をみると、元文小判の重量は13.04～13.12gの間であり、その差は0.08g、文政小判は13.08～13.15gで差は0.07g、天保小判は11.20～11.27gで0.07g、万延小判は3.32～3.33gで0.01gとなった。小判の場合、重量の差は一分金より少し大きいですが、それでも最大で0.08g以内となることが判明した。

なお、表1と表2には、それぞれの一分金と小判について重量の平均値を記しているが、元文～万延一分金の平均値を四倍してみると、次

のようになる（〔 〕内の数値は表2における各小判の重量の平均値）。元文一分金：13.04g〔13.07g〕 文政一分金：13.04g〔13.11g〕 天保一分金：11.20g〔11.23g〕 万延一分金：3.32g〔3.32g〕である。どの一分金も重量の平均値を四倍した場合、各小判の重量の平均値とほとんど等しく、その間で生じる差は0～0.07gの内におさまった。

以上のように、今回展示された一分金と小判の重量を測定すると、同じ種類のものの間で生じる重量の差は、一分金では最大でも0.05g、小判では0.08g以内であり、極めて一定の重量になるように造られていることが確認できた。また、一分金の重量を四倍すると小判1枚の重量に等しくなる点についても、平均値で計算した場合、生じる差は0～0.07gと極めて小さいことが確かめられたのである。

表1：一分金重量一覧

種類	分類記号	重量(単位はg)
慶長一分金	Na1	4.44
慶長一分金	Na2	4.41
慶長一分金	Na3	4.42
慶長一分金	Na4	4.40
慶長一分金	Na5	4.43
慶長一分金	Na6	4.42
慶長一分金	Na7	4.42
慶長一分金	Na8	4.44
慶長一分金	Na9	4.42
慶長一分金	Na10	4.45
(4.40～4.45g) 重量の差：0.05g 平均：4.42g		
元文一分金	Na1	3.27
元文一分金	Na2	3.25
元文一分金	Na3	3.27
元文一分金	Na4	3.26
元文一分金	Na5	3.28
元文一分金	Na6	3.26
元文一分金	Na7	3.26
元文一分金	Na8	3.26
元文一分金	Na9	3.27
元文一分金	Na10	3.27
元文一分金	Na11	3.27
(3.25～3.28g) 重量の差：0.03g 平均：3.26g		
文政一分金	Na1	3.26
文政一分金	Na2	3.29
文政一分金	Na3	3.24
文政一分金	Na4	3.26
文政一分金	Na5	3.29
(3.24～3.29g) 重量の差：0.05g 平均：3.26g		
天保一分金	Na1	2.80
天保一分金	Na2	2.82
天保一分金	Na3	2.80
(2.80～2.82g) 重量の差：0.02g 平均：2.80g		
安政一分金	Na1	2.24
平均：2.24g		
万延一分金	Na1	0.83
平均：0.83g		

()内の数値は、重量の最小および最大値。平均値は小数三位以下、切捨。



写真1



写真2

表2：小判重量一覧

種類	分類記号	重量(単位はg)
元文小判	Na1	13.04
元文小判	Na2	13.04
元文小判	Na3	13.07
元文小判	Na4	13.07
元文小判	Na5	13.08
元文小判	Na6	13.12
(13.04～13.12g) 重量の差：0.08g 平均：13.07g		
文政小判	Na1	13.08
文政小判	Na2	13.08
文政小判	Na3	13.12
文政小判	Na4	13.15
文政小判	Na5	13.12
文政小判	Na6	13.11
文政小判	Na7	13.13
文政小判	Na8	13.12
文政小判	Na9	13.14
(13.08～13.15g) 重量の差：0.07g 平均：13.11g		
天保小判	Na1	11.25
天保小判	Na2	11.22
天保小判	Na3	11.27
天保小判	Na4	11.22
天保小判	Na5	11.23
天保小判	Na6	11.27
天保小判	Na7	11.20
天保小判	Na8	11.25
(11.20～11.27g) 重量の差：0.07g 平均：11.23g		
万延小判	Na1	3.33
万延小判	Na2	3.32
(3.32～3.33g) 重量の差：0.01g 平均：3.32g		

()内の数値は、重量の最小および最大値。平均値は小数三位以下、切捨。

【参考文献】

- ・土屋喬雄・山口和雄監修 日本銀行調査局編 『図録 日本の貨幣 2 近世幣制の成立』 (東洋経済新報社 1973)
- ・三上隆三 『円の誕生 近代貨幣制度の成立 増補版』 (東洋経済新報社 1989)